

50th

理学部ニュース発刊 50 周年を迎えて

今から 50 年前の 1969 年 1 月、東京大学 理学部の広報誌は「理学部弘報」の名で創刊された。その後、「理学部広報」「廣報」と名を変え、2002 年 9 月号から、現在の名称である「理学部ニュース」として隔月に発刊されている。

ちょうど発刊 50 周年を迎える本号では、本誌にゆかりの深い 4 名の方々に寄稿いただくという特集記事を企画した。1 人目の和田昭允名誉教授は、1970 年 2 月号からの 20 刊以上、2 代目の編集委員長として黎明期を支えた。続いて、歴代編集委員長の中でもっとも在任期間が長かったお二人に寄稿いただいた。牧島一夫名誉教授は、2004 年 11 月号から 2012 年 3 月号までの 45 刊、その後を継いだ横山央明准教授は、2012 年 5 月号から 2017 年 3 月号までの 36 刊の編集委員長をそれぞれ務め、現在の形に「理学部ニュース」を発展させてきた。そして最後に、横山広美教授（国際高等研究所カブリ数物連携宇宙研究機構／学際情報学府）に寄稿いただいた。横山広美教授は、2007 年度から 10 年間、理学系研究科広報室副室長の立場から、内容・編集体制を整え、「理学部ニュース」をより本格的な広報誌へと充実させることに大きな貢献をされた。

1969 年の創刊から 50 年間の「理学部ニュース」はすべて電子化され、理学部 HP や東京大学学術機関リポジトリで公開されているほか、2012 年より ISSN2187-3070 を取得し国立国会図書館でも蔵書されている。ぜひ、ご覧いただきたい。

 The RIGAKUBU News
<https://www.s.u-tokyo.ac.jp/ja/story/newsletter/>



世界の先頭を走ろう！ 東大理学部



図：理学部物理学教室の教授・助教授（1963年）
前列向かって左から植村泰忠、木原太郎、今井功、小穴純、小谷正雄、平田森三、宮本悟楼、野上耀三、西川哲治
後列向かって左から有馬朗人、飯田修一、森永晴彦、宮沢弘成、桑原五郎、小柴昌俊、平川浩正、和田昭允、後藤英一

本稿では、私が経験した「理学部ニュース」、計算機ネットワーク「タイスン (TISN, Todai International Science Network)」, そして生物物理学分野、の3つそれぞれの立ち上げ期についてお話したい。1952年に理学部化学科(旧制)を卒業した私は米国ハーバード大学化学教室の研究員になり、生物物理学という新興学問の創成の場に飛び込んだ。そして1962年、講師として東大理学部物理学教室(写真)に「生物物理学研究室」を開いた。そのころ坪井忠二理学部長から「理学部の広報誌を出すことになったから、その編集を担当せよ」との命を受けた。私は東京大学を一般市民の皆さんに親しめるものにしようと、具体的には「学内ところどころ」欄を設け、本郷キャンパス内にある史跡を紹介するなどした。それを機に、それまで学内構成員向けの報告誌だったものに、一般向けの「広報誌」としての役割が加えられ、現在の「理学部ニュース」に至っている。

理学部評議員そして学部長としての東京大学国際理学ネットワーク「タイスン」の立ちあげはやり甲斐があった。1988年のある秋の日の夕方だった。当時理学部評議員だった私のところに天文学教室の吉村宏和助教授(当時)が訪ねてきた。ハワイ大学が国際的な研究用計算機ネットワークの日本への上陸先を捜しており、これを東大理学部が受けるべきだという。聞けば他の大学も動きはじめているらしい。俄然競争心が燃えて、計算機業界にパイをもつ坂村健・情報科学科助教授(当時)を通して富士通株式会社に寄付のお願いを申しでた。山本卓真社長以下、この国際的企業的首脳部の反応はまことに迅速・的確だった。ただちに回線使用料

と周辺機器の支給をいただき、私が理学部長になった1989年4月の理学部教授会で「タイスン」が認められ、釜江常好教授(当時)がリーダーになって立派に発展させてくれた。これは現在のインターネットの先駆けともいえるものであった。

生物物理学は、私が国際ユニオンの8人の理事の一人になるなど、日本はトップ集団にいた。物理学教室の「生物物理学研究室」では「生命現象を物理学で解明しよう、これまでなかった新しい学問領域を開拓するのだ」との意気込みで、週に一度夕食後の2~3時間、だれでも参加できる「生物物理セミナー」を開いた。すると理学部だけでなくほかの学部や研究所からも元気で優秀な若手30人ばかりがきて、新着の論文を紹介しあって最先端の研究を勉強し、この新興学問のあるべき姿について議論を闘わせた。「生命の物理学的理解」というスローガンへの皆の共鳴が、ヒシヒシと伝わってきた想い出は懐かしい。ところがある教授が変なことをいい出した—「物理学で生物が分かるはずがない」と。そして自由な大学にあっては信じがたいことだが「生物物理はイカガワイ学問だから、和田の生物物理セミナーに出るな」と若手教官や学生に禁足令をだした。でもさすが東大若手のレベルは高く、禁足された諸君が「ウチの教授がこんなこといってますよ」と笑いながら参加してくるのだから愉快だった。

さて、この8年間に私は250編のサイエンスエッセイを書いた。新聞や雑誌に載ったそれらは全部、私が常任スーパーアドバイザーをしている横浜市立「横浜サイエンスフロンティア高等学校」のホームページにあるので、ご一瞥いただけたら幸である。

和田 昭允 (東京大学名誉教授) ※第2代目編集委員長

理学部ニュースの50年と今後の50年

50年前に創刊された「理学部弘報」第1号(1969年1月)は、久保亮五学部長の「この弘報は、昨年来の異常事態に対し学部内に風を通すべく始めるもので、やがて新しい理学部をつくる一つの力に育ってゆくことを望む」という趣旨の巻頭言で始まる。異常事態とは、前年6月の機動隊導入から1969年冬の入試中止や安田講堂「落城」への過程をさすが、当時の理学部執行部の真剣さは、最初の4号が半月間隔で発刊されたことから窺える。「弘報」は3月からは月刊に、5月から「広報」の表記になり、1972年度からは隔月発刊となった。1968年4月に駒場に入學した私は、この異常事態の波をまともに被ったが、本郷に進学後も「広報」に接した記憶は乏しい。

助手で採用された宇宙航空研究所で、私は初めて広報誌に関わることになった。同研究所が1981年度から文部省直轄の宇宙科学研究所(ISAS)に開組された際、故・平尾邦雄先生の卓見で広報誌「ISASニュース」が発刊され、その初代の編集委員の1人になったのである。ここでは、宇宙の解説でおなじみの川泰宣さんに編集作業の手ほどきを受け、後の財産となった。

1986年、母校の理学部に戻り「理学部広報」を意識したが、衛星の打上げなど華々しい記事に事欠かないISASニュースにくらべ、それは古色蒼然と「見えた」。新任教員の自己紹介、退職者の挨拶などの記事を、年度初めに理学部事務が各学科に機械的に割当て、学科の編集委員が執筆者を選んでいった。1985年度から季刊となり、やがて電子媒体が浸透し始めると紙媒体不要論が高まり、2001年度には1回のみ刊行だった。

私はそんな中、2000年に理学部ニュースの編集に参加し、当時の佐々木晶編集委員長らと協力し、「ISASニュース」を意識しつつ、広報誌の立て直しを図った。廃刊の危機を乗り越え、2003年度からは「理学系研究科・理学部ニュース」と改題し、部分的に色刷りを導入した。2004年11月から編集委員長を拝命すると、編集委員会を組織し、奇数月20日の刊行を厳守すること、即応性を高めること、教職員だけでなく学生・院生・学外者にも魅力的な広報誌にすることになどに注力した。2005年度より全頁カラーになり、小柴先生のノーベル賞記念(2002年11月)や、東日本大震災での「放射線特集」(2011年5月)では、即応性を発揮できたと思う。2012年3月で委員長を横山央明さんにバトンタッチしたが、その後も様々に進化しつつあり喜ばしい。

この50年間を顧みると理学部は、大学院重点化(1992年)や国立大学法人化(2004年)という変革を経験した。内部的にも、数学科と情報科学科が研究科として独立し、地球物理・地学系の4専攻の統合、2生物科学専攻と生物化学専攻の統合、三期にわたる新一号館の建造(写真)など、変化を続けて来た。そこでいま単色刷りの「広報」を読み返すと、こうした流れを刻印しつつも、そこには基幹学問の教育と、基礎研究とに対する、揺るぎない信念が貫かれていたことが分かる。昨今、これらは大きく揺らぎつつあり、とくに私が宇宙の研究を通じて関わってきた二つの国立研究開発法人では、トップダウン経営と時流に対する付度により、さまざまな懸念が急増している。自分が編集委員長だった折、こうした流れを十分に見通せなかった不明を反省しつつ、今後の50年は「理学部ニュース」が、基幹教育と基礎研究に対する堅固な礎の役目を果たすことを祈念する。これが50年前の故・久保亮五先生の巻頭言に対する、われわれの答であろう。

末筆ながら、編集の苦楽を共にした教職員の皆さんに、深く感謝したい。



図：竣工直後の理学部新1号館・西棟。「理学部ニュース」1998年3月号の表紙(白黒)のカラー原版で、化学専攻の編集委員(当時)だった井本英夫氏が撮影したものを拝受した。新1号館の竣工記念パンフレットにも使われている。

牧島 一夫 (東京大学名誉教授) ※元・編集委員長。右の数字は編集委員長在任期間(歴代最長)

変えるもの変えないもの、大切なこと

図：震災特集号（2011年5月号）の理学のキーワード放射能関連の特集ページ（左）と、誌面刷新後の2015年5月号表紙（右）。



理学部ニュース発刊50年、おめでとうございます。このように長く続いているのは、現役編集委員や先輩委員の方々のお力あつてのことだと思います。

私は編集委員を、途中2年の中断をはきんで、2005年5月号から2018年3月号まで11年のあいだ務めさせていただきました。牧島一夫編集委員長や加藤千恵さん・小野寺正明さん・武田加奈子さんや横山広美さんたち広報室のスタッフ、それから編集委員のみなさんとの編集作業は、たいへんながらも理学部のさまざまな分野の研究や、専攻ごとの考え方の違いなどにふれられてたいへん勉強になったものです。

この期間で、もっとも大きなできごとは、2011年3月の東日本大震災と福島第一原発事故でした。海外長期出張直後の私は当時実は編集委員ではなかったのですが、急遽お手伝いとして震災特集号の編集会議に招集されたのです。その特集号では、連載「理学のキーワード」欄で放射線関連の言葉を掲載することになり、「放射線と半減期」「放射線に関する単位」「生態系における濃縮」「体外被曝と体内被曝」「大気中での拡散」「海洋中での拡散」などが選ばれました。当時、事故放射線に対する考え方や、原発に対する姿勢で、研究とは違った側面から科学者がさまざまに評価されているような状況でした。記事執筆依頼のときの私のメールには「あくまでも『理学研究から責任をもって述べるができること』に限定していただければ結構でその意味で一般的な記述になっ

てもかまいません。『可能な範囲で社会に情報提供する』というのが背景にある趣旨です」とあり、とても慎重に編集作業をすすめていたことが伺えます。いささか保守的な姿勢だったかもしれませんが、「責任をもって」という態度は広報においてはとても大切だと感じ、この考えはその後の私の広報や編集の姿勢を方向づけたと思います。

もうひとつ、内容的には内輪の話になってしまっていますが、私の編集委員長就任期間にあった、理学部ニュースにとってのいちばん大きなできごとは、2015年5月号での誌面デザインの刷新です。武田加奈子さんと横山広美さんが軸となつてすすめてくださり、質実剛健な理学部ニュースの雰囲気を残しつつも、よりプロフェッショナルなデザインとなりました。実はそのさいに、「理学部ニュース」という名前も変えよう、という提案もあり、編集委員会ですさまざまな候補を挙げ、いよいよ最終決定というところまでいかけました。けれど最後の最後に「やっぱり残そう」という大逆転がありました。2か月に1度しか発行しない冊子で「ニュース」という名前はいささか違和感があるかもしれませんが、定着した名前なので変えないほうがよい、という結論でした。編集委員長として実行した唯一の自慢できる決定です。

さて節目を迎えた理学部ニュースですが、ひいき目かもしれませんが、読み物として結構おもしろい。この勢いをうしなわず、60年、70年と続いていくことを、編集委員会のみなさんに引き続き期待いたします。

横山 央明 (地球惑星科学専攻 准教授) ※前・編集委員長。左の数字は編集委員長在任期間(歴代第2位)

歴史を刻み 「新しい理学部をつくる」 広報誌の意義

理学部ニュース 50 年を心からお祝い申し上げます。長い間の弛みない発刊には、関係者の皆様の想像を超える甚大なる努力があり、心から敬意を表したい。僭越ながら本稿を承った私は、2007 年に広報室に着任して 10 年間、編集委員会に同席をさせていただいた。専攻の異なる教員、事務員が集う編集誌委員会の活動は楽しく、2014 年には編集委員の広報室・武田加奈子さんが担当された誌面の全面改訂を楽しくサポートさせていただいた。着任当時の編集長・牧島一夫先生のもと、初回からのすべての理学部ニュースを PDF 化する事業が行われ、現在はネットで読むことができるのはたいへんありがたい。横山央明編集長時代は新しい企画が次々と誕生し、とくに、昔の記事や資料を発掘した「温故知新」はとても面白かった。安東正樹編集長のいまは、冒頭のエッセイを毎号、楽しみにしている。

思えば在籍した 10 年の間にもいろいろなことがあった。喜ばしいこととしては卒業生である南部陽一郎先生 (2008 年 11 月号) や梶田隆章先生 (2015 年 11 月号) のノーベル賞受賞があり、かたや「『事業仕分け』による負の影響を懸念する」(2010 年 1 月号)、また東日本大震災関係記事特集 (2011 年 5 月号) などがあった。時代の変化の波を受けながら、理学部ニュース編集委員会は肅々と、理学部の良心を形にし、共有しながら歴史を刻んできた。そのときどきの記事を読み返すと、執筆者である理学部の構成員が何を考え、悩み、喜び、どう行動したのかが分かり、その真摯な対応に頭が下がる思いである。

理学部ニュースは「理学部弘報」として 1969 年に発刊している。本部広報課が発刊する「学内広報」も同年の刊行で、その理由は前年に世界的におきた革命で、東大も大きく揺れていたことによる。

理学部弘報の発刊理由を、久保亮五理学部長は以下のように述べている。

「知らないこと、知らされないことからくる不安は、次々に困難を拡大する要素となる。この弘報は、理学部の中に風を通すひとつの助けとして始めるものである。いまのところ、はなはだ無味乾燥な記事的なものにすぎないが、しかしそれでもこの仕事を引受けて下さる方々の労は小さいものではない。理学部の皆さんの協力によって、これがやがて新しい理学部をつくるひとつの力にまで育ってゆくことを望みたい。」

理学部弘報はつまり、内部向け情報共有誌として始まった。久保先生はその重要性を指摘するに留まらず、「やがて新しい理学部をつくるひとつの力」にまでなしてほしいと、指摘されている点に深い感銘を受ける。執筆者は構成員。編集委員会による企画・編集を通して、理学部ニュースは理学部の姿を形つくる。多くの組織で広報誌は外部向け広報のため作成されるが、その作業は意図せずとも内部の情報共有を促し、自らのあるべき姿を思索することにつながるのだ。

1969 年は科学史や大学論でも区切りの年でもある。それまでの単純な科学礼賛から、公害問題を経て、科学技術の社会における在り方が問われ始めた。それから 50 年、科学者には科学の質管理や製造責任に加えて、社会への応答責任が期待されている。今の時代の困難は、即効性のある経済的役立ちを求められることである。しかし好奇心を基にする基礎科学の価値は変わらない。この時代の風をどのように受けて、守るべきものを守り、変わるべきを変わるとするか。理学部ニュースが考える拠り所となり続き、常に新しい理学部をつくっていただきたいと心から願っている。



図：在籍中に編集された特別記事から「時代の移り変わり」を振り返って。(左) 震災特集号にて、地球惑星科学専攻の井出哲准教授 (当時) による「東北地方太平洋沖地震の概要」(2011 年 5 月号)、(中) 梶田隆章先生のノーベル物理学賞受賞特集記事 (2015 年 11 月号)、(右) 「『事業仕分け』による負の影響を懸念する」(2010 年 1 月号)